慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「板倉卓造・西本辰之助両先生謝恩記念論文集」献呈の會
Sub Title	The report of the meeting of presenting the commemora-tive essays to Dr. Itakura and Dr. Nishimoto
Author	中村, 恵(Nakamura, Kei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1956
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.29, No.5 (1956. 5) ,p.89- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19560515-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

記事

「板倉卓造・西本辰之助兩先生謝恩記念論文集」献呈の會

四月五日（一九五六年）、午後五時から慶應義塾大學名譽教授板倉・西本兩先生を迎えて、「法學研究、板倉卓造・西本辰之助兩先生謝恩記念論文集」を兩先生に献呈するの會が、銀座の交詢社で開催された。當夜の出席者は現法學部教職員の約三分の二の五十名であつた。

主賓

板倉卓造先生

西本辰之助先生

出席者

及川恒忠、小池隆一、潮田江次、永澤邦男、前原光雄、津田利治、今泉孝太郎、英修道、伊藤政寛、米山桂三、峯村光郎、手塚豐、藤原守胤、中村菊男、内山正熊、伊東乾、田中實、石川忠雄、河口眞一、石丸重治、河村知男、瀬下良夫、淺野均一、高島正夫、生田正輝、石井良博、田口精一、金子芳雄、大山正武、宮崎俊行、中村洸、中谷瑾子、多田眞鋤、山崎照雄、三澤進、瀬尾睿三、人見康子、三浦又治郎、森田赳夫、安原基輔、笹島恒輔、關口謙司、川口實、宮澤浩一、賀川俊彦、石川明、向井健、十時嚴周、奈良和重（以上法學部關係者）、中村惠（「法學研究」編集）

會の進行は中村菊男教授擔當の下に進められ、同教授の開會の辭についで、法學部長前原光雄教授の謝辭を兼ねての記念論文集献呈の挨拶があつた。

「記念論文集に執筆の十七名の教授・助教授は、いずれも板倉・西本兩先生に親しく薫陶を仰いだ直弟子か或はその直系の孫弟子で、いずれも兩先生の學風のもとに研究勉學をつづけて今日を爲したものであります。病氣療養などのために、全教授執筆の論文集とすることはできなかつたが、この四百六十頁を越える記念論文集の中に、兩先生の指導誘掖を仰いだ人々が各自專門の分野で眞劍に研究をつづけている眞摯な姿をくみ取つていただけることと思います。

兩先生はいずれも古稀を越えられているので、本來なれば、今日までに還暦祝賀の論文集と古稀祝賀の論文集と、併せて四册の論文集が刊行されてよいわけで、ことに板倉先生は昨年喜壽を迎えられているのであるから、これにもう一つの祝賀論文集を加えるならば既に五册の論文集を献呈申上げておらねばならない。今日に至つてようやく一册の論文集をまとめることの出來たというのは、日頃兩先生の學恩の下に育つてまいつた弟子のわれわれとして、懶惰はなはだお恥しい次第である。

兩先生には年來益々お元氣で、現に母校の名譽教授であり、同時に學事顧問を兼ね、或は操觚界の重鎭として、或は大學の學長として、兩先生ともども第一線に鬘鑠として御活躍であります。兩先生薫陶の下に成長をつづけてまいつたわが法學部の今日の隆盛を喜んでいただくとともに、ささやかながらわれわれ一同微意を盡してまとめましたこの論文集を——兩先生を生みの親、育ての親とするこの學部機關誌『法學研究』の記念號の形で捧げることのできましたことを、必ずや兩先生におかれては、他の何人よりも多くの思い出と喜びをもつてお受け下さることと思います。この記念論文集に添えて、法學部同人相寄つて年來謝意の一端を表したく兩先生に羽根布團をお贈り申上げました。これは兩先生の今後ますます御健勝に過ごされるように、御休息の一層安らかならんことを衷心祈つております弟子達の微衷として御受納下さるようお願いする次第であります。」

法學部長から、板倉・西本兩先生に、記念論文集特製本並びに目錄が贈呈された。これにこたえて板倉先生が挨拶のために起たれた。

「今夕は私にとつては長い一生で初めての方まで加つての盛大な會で有難い幸せであります。私は名譽ある慶應義塾の教職にあること四十五年で終戰後その職を去りました。顧みて塾の教職生活が一番幸福であつたと思う。不平不滿なく、不安なく、物質的にも不自由がなかつた。元來月給などには無關心なのですが、塾を出て教職についたその時から、自分が一番澤山もらつているという自信も持つていました。こんな風で自分自身では不平不滿がなかつたが、生來の我儘者で隨分迷惑はかけたに相違ない。

私は日清戰爭のとき塾の普通部にいた。それからずつと塾の世話になつているのだから長いことであります。今日私は時事新報に關係しているが、これも塾のお蔭だ。塾恩洪大、私こそ塾に對して謝恩せねばならないと常々考えている。私を更に一層幸運ならしめたものは後繼者であつた。私は生來の怠け者だが、後繼者にはなはだ惠まれ、國際法では前原光雄教授、政治學では島田久吉教授と、當代得がたき一流者に惠まれました。

私は年をとつて長きは益々望むところであるが、年寄つて老い込むことは望まない。ただ、年をとつたという自覺とともに、もつと勉强しておけばよかつたと泌々思うことがある。ギリシャ、コリンズの哲學者ダイオジェニーズがアレキサンダー大王に會つたときのこと、大王は、ダイオジェニーズにむかつて『君は既に年老いたから學問をすてて休息してはどうか』とすすめた。ダイオジェニーズは直ちに答えて、『そういうのであれば、學校でレースをするとき、ゴールが見えているのに、走るを已めよというのか。私は一層速力を早めて走ろうと思う。』私自身、ダイオジェニーズに比すべくもなく不勉强だが、そろりそろりゴールに向つている。塾の學會に何等か貢献するところがありたいと常々心懸けてはいるのであるが、まことに牛歩遲々、日暮れて道遠しの感が深い。

今夕いただきましたこの『法學研究記念論文集』は一生のモニュメントとして私の書齋に寶藏するつもりである。死後私は何處へ行くか、恐らく地獄へ行くであろうが、閻魔大王にむかつて、

私の一生悔ゆることのみ多いが、この記念論文集だけは私の誇りとすることができると、自慢するつもりである。私は今日まで塾のお蔭ではなはだ幸福であつた。今後もまた、諸君の勞作になるこの立派な論文集のお蔭で幸福であろうと信ずる。」

次いで西本名譽教授の謝辭があつた。

「私共のために法學研究特別號を編集して頂いてまことに有難い。

法學研究は本年で創刊以來三十五年目であるということだが、これは戰前と戰後に分けることができる。創刊の當時、この雜誌の發行を熱心に主張した人はここにいられる小池君と、今は故人の峯岸君とが熱心であつた。當時、小池君は助手、峯岸君は三年（舊制大學）であつた。その當時既に、中央大學に『法學新報』、法政大學に『法學志林』、東大に『法學協會雜誌』、京大に『法學論叢』等があつて、慶應にも何か學部の機關雜誌があつてもよかろうというのであつた。

それまでの慶應では研究發表は專ら『三田學會雜誌』一本であつた。だから表紙にも、經濟・政治・法律とサブ・タイトルがついていた。自己の學說を發表する專門雜誌が新しく發刊されるということはまことに結構なことであつた。ところが、一方で大いに賛成しながら、他方甚だ氣分の進まぬところがあつた。これは私の私情に過ぎないのであるが、熱心な主張者の一人である小池君はまだ助手であつたし、政治科は別として法律科では一體誰が書くか。專任教授である神戸（寅次郎）君と私が專ら矢面に立たねばならない。他に西村（富三郎）君がいたが、學校行政など多忙な事情があつて、結局は二人で書くこととなつて相當苦しいであろうと想像された。

私は留學から歸つて（大正二年五月）早速商法總論を書いた。これは當時塾監局に出來た出版局から發刊されたものであつた。その頃の塾は今の理事制でなく幹事制であつたが、當時幹事の石田（新太郎）君の度々の催促の結果やつと出來上つたものであつた。歸朝早々の私は講義のノートすら出來ていなくて、石田さんの强硬な催促を受けるのがつらさに、學校を休んだこともあつた。石田さんは誰から聞き傳えたか、餘り强く催促すると西本君は學校を休むということだと、こぼしていたなどと後になつて聞かされたことがあります。こんな風だから法學部の專門雜誌を持つことは良いが、その執筆が心配であつた。

そのうち、三田學會雜誌の方は經濟學部機關雜誌と名乘ることとなつた。當時の法學部の學生は三百人に足りない數であつたが、これを相手に學部の雜誌を出すとすると、塾內部の先生たちにも少しは買つてもらわねば經濟的に成立困難と思われた。或る日、教員室で私がそばにいるのを知つてか知らずか、他學部の教授が、『法學部で雜誌を出すそうだが、二三ヵ月もすればどうせツブれるだろうから、援助もへつたくれもなかろう』と聲高に話していた。これを聞いて、私は石に嚙りついても雜誌をつづけようと決心した。『法學研究』の編集事務は及川さんと私がやつた。創刊號は立派に出來上り、二號三號も樂に出來た。しかし書く人が少いので段々苦しくなつた。原稿の書けない二三日の苦痛は格

別で、それだけに書き上つた日の晩酌は一段と味がうまいというわけです。刊行を續けるためには、時には自分の原稿で雜誌の大半を埋めたこともあるが、これは何も、私が獨占したわけではない。雜誌を續けて出したい一心であつた。

及川君と一緒に、こんな風に十年間編集をつづけ、そのあと島田君と峯岸君が八年位編集をつづけた。適々太平洋戰爭の戰局が切迫し、物資不足の折柄、警視廳では雜誌の統合廢刊を計畫し、『法學研究』もその槍玉にあがつた。當時、原稿の集りが悪いために、一月に上梓のはずが三月になつていた。既に印刷工場に原稿を廻わした後であつたので、これは『法學研究第一輯』として發行した。

終戰後この『法學研究』は、從來クォータリーであつたものを、月刊で出すこととなつた。これは一つに法學部の陣營が充實したことを物語るものだ。毎月皆樣が專門の分野で健筆をふるつていられるのは喜ばしい限りである。

この度は私共のために立派な『記念論文集』を作つて下され、望外の光榮である。生命長ければ恥多しというが、無上の光榮を與えられ、盛大な宴を張られ、誠に有難い幸せである。」

次いで司會者の指名を受けて及川教授、小池教授、潮田塾長、永澤理事が交わる交わる起つて法學部後學として、板倉・西本兩名譽教授に對し、想い出話を織り交ぜての謝辭があつた。いずれも尊敬と親愛感のこもつたもので、教授それぞれの風格がたくまずして現われ、拍手を呼び笑聲を湧かせ、滿堂先進、後進の別なく一家團欒さながらの慶びをわかつた。食事後も懷舊談に話がはずみ、席を起ちかねる人々が自らに兩先生を圍んで和氣靄々、九時を過ぎてようやく散會した。

なお、當夜會場の模樣は、すべてテープ・レコーダーによつて錄音され、後日レコードにおさめて兩先生に贈呈されるはずである。

（中村　憲）